又或る時，コミズムシが鳴くのを研究しようというので，牛込と本郷とで別々に観察を始め，電話で毎日情報を交換したことがあった．こちらでガラス器の壁にコミズムシが頭をぶっつけて立てる音に首をかしげている頃，江崎君の方では前脚で顔をこすって鳴くらしいと，早くも問題の真相を捉えていた．私が江崎君と最も親しかったのはこの頃であったと思う．

大阪に引越され（1913年頃）てからは会う機会もなく，そのうちに私はアメリカに行ってしまったが，時々の文通でお互の動静は知っていた．ニューヨーク時代に私は又蝶を始め，江崎君と共著でヒメキマダラヒカゲの新亜種などを書いたことがある．江崎君は鹿児島の七高から東大に進まれ，大学を出るとすぐ九大の助教授になり，同時に欧米留学の途につかれたが，滞欧中寄せられたエハガキの数枚は今も私のアルバムの中に残っている．

アメリカで会えるかと思っていたが，私は1925年ひと足先きに帰朝したので，江崎君との再会は結局東京に於てであった．たしか1927年の8月だったと思う．ドイツで結婚されたロッテ夫人とともに拙宅を訪ねられた江崎君の背が高くなったのに驚いたが，昔のままの静かな人だった．その後は蝶類同好会，最近は日本鱗翅学会などを通じて会う機会はあったが，お互に本務の忙しさに妨げられ，江崎君が上京されても，いつも会えるとは限らない位で，いわば“細く長く”年月が経た．それでも平均1年に1回は会ったと思う．会えばいつも虫の話で持ち切った．

一昨年江崎君の尋常ならぬ病気のことを聞いて驚いた．第1回の手術材料の組織標本は九大病理から癌研に廻附され私も検鏡した．私はそれを淋巴腺原発のものと解釈し度かったのであるが，病理組織の専門家は転移であると診断した．それが正しかったのである．九大病院での治療は予期以上の効果を示していたようであるが，原発部位に手がとゞかぬので只次々と出て来る淋巴腺転移を叩くこと丈けしか出来ず，それを知っている私は辛い思いをした．この時期に到っても病苦を押してしばしば上京される江崎君に会う毎に，何にもして差し上げられないのが苦痛であった．

それにしても，余命いくばくもないことを自からも知っていたであろう江崎君が，少しも乱れることなく最後まで東ほん西走されたのは，まことに立派だった．文字通り昆虫学に一生を捧げつくした江崎悌三君であった．

江崎君と私との交遊には大きなエピソードは何にもない．嘈嘈として急雨の如き大絃もなく，切切として私語の如き小絃もなかったのだ．その静かなしらべには，しかし，余音嫋嫋として絶えざること縷の如きものがあった．そして，その縷が今切れてしまったのである．淋しい．（1957年12月21日御葬儀の日にしるす）

江　崎　さ　ん　を　偲　ぶ

竹　内　吉　蔵

江崎さんが私よりも早く逝去されて反対に私がこのような思出を書くことになるとは夢にも思わなかった．それが思いもよらぬ悪質な病魔の襲うところとなり2度の手術も大した効果なく，遂に昨年（1957）12月14日午前2時に永眠されたのである．江崎さんは私等の期待したように稀に見る偉大な昆虫学者になられ，昆虫学界のみならず動物学界に貢献された功績は甚だ大きく，いつまでも後世に称えられ輝くことであろう．然し今のところ江崎さんでなければ出来ない問題がかなりあって皆がそれを期待していたのであるが，まだ58才の若さで逝去されたことは実に残念なことで学界の損失は甚大といわねばならない．江崎さんもそれを強く気にされたのか御遺族のお話によると何事をするにも大変死を忌み，生きぬく様につとめられたとのことである．私はそれを聞いて江崎さんの学問に対する熱情と責任感の強いのに驚き泣かずに居られなかった．然し手術の結果は医師のいうように幸いと奇蹟的に約2ケ年延命されて私等が案じていた日本昆虫学会の40周年記念大会とその展覧会をいとも盛大に会長としての大役を果され，且つ天皇陛下を展覧会にお迎えしてその案内役を無事につとめられたことはせめての慰みで江崎さんも満足されたことであろうが，これは無理をされたもので逝去をはやめたものと思われる．御葬儀は12月21日午後1時より昆虫学教室葬として九大農学部生物第2講義室に於て神式で営まれたが，お弟子さん達の真心こめた御努力によりいとも盛

大厳粛で偉大なる江崎さんをおくるに誠に相応しいものであった．また江崎さんは昆虫学界のみならず他の方面にも顔が広かったので弔電は知名人からも多く数百通もあって一時郵便局にその用紙がなくなるという1コマもあったとのことである．御葬儀に参列して特に感じたことは江崎さんの指導がよかったものかお弟子さんに優秀な方が多いことで充分遺業は守られ果されるに違いないと嬉しく思った．この点江崎さんは誠に仕合せで安心して冥福されてよいと思う．

江崎さんと私との最初の交りは同氏が東京から大阪の北中に転校されて間もない大正3年の秋と思う．当時江崎さんはまだ3年生だったと思うが昆虫には大変明るく，また語学も達者なのに驚いた．それからは江崎さんも拙著「原色日本昆虫図鑑下」の序文に書かれているように昆虫学雑誌の編集などの相談もあって繁しく往来して夜おそくまで昆虫の話をしたものである．私は5才ほど兄きであったがいつも教えられることが多かった．また箕面などへよく一緒に採集に行ったもので，互に珍虫を捕って抑えられたり抑えたりして楽んだものである．然しこの時分から2人は至極円満で如何なる珍虫でも有吻目は江崎さんに葉蜂類は私に心よくお互に提供しあったものである．その後江崎さんは七高・東大と進学されて大阪から離れられたが，お家が大阪にあってよく帰阪されるのでその都度何処かで会っていろいろとお話をしたり，また採集品を見せあったものである．特に七高（鹿児島）を選ばれたのは南方の昆虫を調べるためであったのである．江崎さんは学生時代から如何にも学者らしく至って無口で態度が閑雅であったので私の母などは江崎さんは大学者になられるだろうとよく云って特に好感をもっていたようである．東大を卒業されると直ぐ九大に就職されたが留学を条件とされたものか間もなく欧米へ留学に渡航された．それを要領よく利用されて約5年の永きに亘り詳しく各国の研究施設を視察され，また多くの学者を訪問されて広い知識を得られたようである．当時私が文通していたドイツの Enslin やフインランドの Forsius などのハバチの専門家にも会われているのに驚いた次第である．私はこの留学が江崎さんを偉大な学者にするのに大変役立ったのでないかと思う．この間に私も大阪から京都へ転居したが帰国されてからは毎年少なくとも2度は京都へ寄られて拙宅か何処かで会って新しい話を聞くのが楽しい年中行事のようになっていた．また徳永君と3人でよく食事を共にして愉快に喋ったものである．御病気後は余り京都へ寄られなかったが御来阪を機会に日本鱗翅学会の会合があって会長としていつも出席されて蛾の研究を推奨されていた．私も江崎さんの病状が気になるのでいつも出席したが，病気前の御元気は見られなかったがいつも思ったより御元気なので安心して，くれぐれも無理をせぬように注意して別れたものでこのように早く逝去されるとは思わなかった．私はもとより江崎さんと絶えず接する機会のあった東京・京阪・福岡等の昆虫学界は一入淋しさは深刻なものとなろう．

このように江崎さんと私の交りは永く40年以上になるが，この永い間にはいろいろ無理なこともあったであろうが1度も不快なことがなく，いつも変らぬ親交が出来たことはむしろ不思議なことで全く江崎さんの深い理解と温情によるものと思われる．勿論私がこの間にうけた恩恵は甚だ大きく，或は江崎さんとのこのような親交がなかったら私の昆虫の研究は今日のように永く続かなかったかも知れない．虫いじりが私の一生にプラスであったかマイナスであったかは判らないが，兎に角殆んど一生を浮世放れして好きな虫いじりをして過すことが出来たのは江崎さんに負うところが甚だ大きい．

江崎さんは見かけ通りに至って真面目な方であったが半面見かけによらず非常に茶目で相当人を馬鹿にしたイタズラをよくされたもので，お弟子さん達も時々困られたとのことである．また動物学会などの大会にユーモアな新聞を発刊して堅苦しい学会に少からずなごやかな味を添えられたのも江崎さんの創意によるものと思われる．江崎さんのされたイタズラを編集すれば或はかなり面白い物語が出来るのでなかろうか．人徳によるのか学者には珍らしく江崎さんにはファンがかなりあって虫聖会という奇妙な会まであって随時に江崎さんを囲んで盛大に会合が開かれ，またエントモフィリアという怪文書が発刊されていたことは周知の通りである．江崎さんが学界に残された功績以外に見逃してならないことはアマチュアの教養につとめられたことで，その功績は甚だ大きい．江崎さんの思出はつきないが余りながくなるので，心から御冥福と御遺族の御多幸を祈り筆を擱く．江崎さんながながと有難う．